ヘンリー・アダムズの日本旅行

樋　口　日出雄

明治維新以後，約30年間を対象として，来日外国人の動向を主題として扱った一種の日本文化史ともいえる『鹿鳴館』（*The Deer Cry Pavilion*）の著者であるパット・バーによれば，最初の10年は「鉄道技士，教師，急造事業」で代表される創業の時期，次の10年間は「旅行者，宣教師，災害」で代表される中堅の時代，最後の10年間は「外交官，蝶々さん，歓楽」で代表される変転の時代である。この中堅の時代の末期19年に日本を訪れた外人旅行者のひとりに米国籍のヘンリー・アダムズがいる。

ときはまさに，日本帝国がやっと創業の時代を終え，三千万の人口（アダムズの記録）を有する東洋の一島国が，世界の強国となるべく一意「近代化」の促進に努めたころである。帝国憲法の発布はアダムズ訪日の3年後のことである。アダムズの祖国に目を転ずれば，薄幸の詩人エミリー・デイキンソンの没年にあたり，ヘイマーケット事件の年でもある。労働争議中，何者かの手で爆弾が投げられ，8名の警官が死亡したことを発端として当局が捜査に乗り出し，労働者側も一連のスト騒動を起こしたが，その事件発生現場がシカゴのヘイマーケットであった。アダムズは奇しくも同名のヘイという，ともに政治を語り，文学を論じるに不足のない社交仲間に，コートを供与され，日本土産を買うための依託金まで託されて海を渡ったのである。日本旅行中のアダムズは，ヘイにあててたびたび旅程を知らせる手紙を送ったが，これは依託金管理者からの，ささやかな報告でもあったのである。

政治に対する宿命的な血統は，この人物の背後で糸をひいていた。家系を少しさかのぼるだけで，建国の英雄的な指導者から，有能な外交官に至るまで，歴史的人物の亡霊たちはアダムズ家の蔵に怪しげに集い，群がっていたのである。ヘンリーの代になって，この人物に政治参加を断念させた理由のひとつに，グラント大統領の我慢ならないほど放漫な治政があった。アダムズ自身は，グラントの統治の終った時点で，ハーヴァードの教壇を下り，彼の理想とした価値と秩序を検証すべく，トーマス・ジ

ェフアーソンからジュームズ・マディソンに至る合衆国の歴史に筆を染めんとしていた。「デモクラシーは唯一の主題です」[①]とアダムズは合衆国史について弁明している。彼がことほどに信頼を寄せたアメリカン・デモクラシーの絶頂期が過ぎて，僅か半世紀にも満たない時期に彼の信頼は揺いだ。1865以降の30年間をとって，アダムズはこれを鉄道の時代とよんだ。ボストンの友人たちは鉄道に「入れ揚げて」[②]いた。グラントの政治と産業主義の時代精神は，アダムズをしてリアル・ポリティクスの分野から手を引かしめる二大要因となったのである。

アダムズが折角起稿した合衆国史を中途にしたままで，日本旅行に索かれたのは，直接的には前年の妻の自殺が原因であるが，それ以前にもその芽があったというべきであろう。彼の自伝『ヘンリー・アダムズの教育』（以下『教育』と略記）によれば，アダムズにとってグラントは，「間歇的なエネルギーと思われた，活動期においては途方もなく強大だが，休息時においては受動的で従順であった。」[③]アダムズはグラント政権に如実に示された致命的なごまかしに苦情をいった。時には，グラント政権をとりたててアメリカ的でないとまで酷評した。「鉄道に入れ揚げた」友人たちの本拠地ボストンを捨ててワシントンに居を構えたとき，アダムズは政治を観客席で見物しようとしていた。だがそれさえも退屈になったとき，「きわめて安易な道が東洋へ通じていた。」[④]アダムズは画家のラファージと連れ立って日本へと旅立った。

I

近代日本にとって無類に多事多難な明治10年代が終ろうとしていた。明白なことは，アダムズが政治学の教材を求めて日本に上陸したのではないということである。コレラ流行中に横浜に上陸したアダムズとラファージは何を企んでいたのであろうか。手紙でみる限り，二人は政治向きの事には余り関心を示していない。アダムズの日本国内での例外的なただ一度の公式訪問は駐日英国公使を尋ね，旧交を温めることであった。日本旅行の後半において，京都に着いてみると，彼らを待ち受けていた日本政府筋の招待者の群れが，アダムズたちに音をあげさせる結果となった。

私は奔走して接待を受けないようにしている。やっと今となって，身の振り

かたがわかってきた。旅人にはつきまとわないでほしい。自由でさえあれば，それだけで幸福なのだ。恩知らずと罵って放免してほしい。⑤

とアダムズは記している。彼は酷暑のさなかで，民主主義者の公平を維持する苦難を味わったことであろう。日本においても彼は，市民的民主主義者であるよりも貴族的なそれであったかもしれない。

たしかにアダムズの歴史観を貫き流れているパトスは，政治学でいうデモクラティックな情熱である。その彼が日本旅行中には，一貫してアマチュアの収集家として，いわば画家のラファージのお供として，自らの歩を守り，決してプロの収集家と争奪戦を演じなかった裡には，このポレーミッシュな歴史家が日本の歴史的現実に対して支払った代価が，何気なく積算されているのかもしれない。実際に彼らは，日本全体を喰い尽したように大量の収集品を持ち帰ったが，その大部分は友人との義理によるコミッションと贈答品で占められ，個人の財産となると見積られる部分は，全体の十分の一にも満たなかったのである。

アダムズにとって無類の財宝のありかは中国大陸であった。したがって西洋の修道院にも似た寺社建築が多い京都で，京都県令代理の格別のはからいで多くの寺社詣でをしたとき，見るべきものを見たという一種の安堵とともに，彼の内部の深層にある地平線から東洋の見果てぬ夢の一角が消えうせたということができよう。逆説的にいえば，東洋への夢が弊え果てんとしたまさにそのとき，彼の良心はやましさを放逐し彼の理想とする「実生活をしている人々」（“real live people”）が出現するのである。バタフライ・ダンス（蝶の踊り）と彼がよぶところの一種の盆踊りに彼は魅せられる。人が蝶と化して舞い踊るさまは，アダムズの実生活人の基本的な像と重なり合うのである。

実生活人の生きた見本は，実はアダムズの周辺に実在したのである。日本旅行へ出発する直前にニューヨークで別離を惜しんだばかりの彼の友人で探険家のキングは，ロッキー山中まで足を伸ばし，アメリカ・インディアンなどの「高貴なる野蛮人」と交わっていたので，アダムズはキリスト教国にあって異教の風習から生活の知恵を学ばんとする実例に，いながらにして接していたわけである。画家のラファージにしてもキングの同族同類といって過言でない融通無碍の精神の持主で，彼はアダムズが論争的になるのをたしなわるのを習いとした。この画工はヘンリー・ジェイムズの肖像

を描いたり，ボストンの教会のステンド・グラスのデザインを担当したりした実績があった。夫人を失った直後の悲嘆のアダムズに日本行きを歓めたほどの彼の東洋熱は，この日本旅行の成果として発表された北斎に関する西洋では最初の評論として結実したのである。

Ⅱ

アダムズとラファージの日本旅行の内実を知るためにも，彼らの旅程を次に掲げておこう。

7月	2日	横浜に着く。アダムズ48歳。ラファージ52歳。
		ビゲローと落合い案内を頼む。
	↑	
	一週間	東京見物。フェノロサを知り案内を頼む。
	↓	
	11日？	ビゲローを案内人として日光へ出発。
		日光近くの温泉宿に一泊する。
	12日？	日光到着。フェノロサの家族と交わる。
	17日	入梅。長期滞在を決定する。
	26日	大阪の山中商会より荷が届き，アダムズは北斎の版画を収集せんと計るが，上京中のフェノロサの反対に会う。
8月	17日	湯元へ馬で旅行，温泉風俗に真の日本を見出した心地になる。
	29日	日光より下山し横浜へ帰る。
	↑	
9月	一週間	本国への土産品の関税処理に忙殺される。
	↓	
	3日	日本人通訳ホー（？未詳）を雇う。
		鎌倉に遊び大仏を見物する。
	5日？	横浜よりフランス船で神戸へ向う。
	8日	京都へ入る。
	12日	ウサギ狩を体験。
	17日？	人力車で奈良へ向う。
	20日？	陸路東海道経由横浜へ向う。

10月12日　日本を立ち帰国の途につく。
　　フェノロサ一家同行。

日本旅行に先立ってアダムズとラファージは，昂然と「涅槃」を探索するのだと公言していた。ラファージはサンフランシスコに向う車中，そのことを新聞記者に発表した。その若い記者は，「流星の如く顔を輝かせて一瞬こちらの顔色を窺って『もう手遅ですよ』といった」[6]。二人は日本関係の書物をいくらか選んで通読したにちがいないが，アダムズが日本まで携えてきたのは，アーネスト・サトウの著作『日本』であった。20年間日本に滞在し，激動の日本をつぶさに観察したサトウは，やがてイギリスの極東政策にあずかって力があり，外交部門で手腕を振った。やがてアダムズの友人ジョン・ヘイがアメリカ国務省内で極東政策を担当したのと好対称をなしている。その極東の海域――合衆国にとっても重要な軍事区域となろうとしていた太平洋へアダムズは船出したのである。

7月2日，アダムズとラファージは横浜に上陸した。ビゲローに次いでフェノロサが一週間の東京見物に連れ添って案内の労をとってくれた。二人は48歳のアダムズと52歳のラファージよりもおよそ半世代若かったが，同じハーヴァードの同窓であった。年輩からいえば，アダムズが母校で中世史を講じていた頃，同じキャンパスのどこかで二人が東洋への夢をはぐくんでいたとしても不思議はない。ビゲローはアダムズ夫人の近親にあたり，アダムズに4年先立ってボストンから東洋美術研究の旅に上り，日本国内を広く旅行し大規模な収集を開始していた。フェノロサは東京大学で「お雇い外人」教師を務めるうちに，美術に目が利くことを認められ文部省の美術取調掛の役職にあった。岡倉覚三（天心）と組んで，これまた日本国内を巡回し，美術品徴収に努めていた。

無余涅槃の達成を目指したアダムズたちの意気も，かくして年若い活動的な収集家の気炎にのまれて消え入らんとしていた。しばらくのあいだはアダムズの証言するように「フェノロサとビゲローは我々に立ち入る隙をあたえない」ほどであった。上陸第一歩から道徳に関しても，宗教に関しても彼らの権威が絶対的な掟となった。上陸後日本語を巧みに操るビゲローに舌を巻いたアダムズは，公用中国語をマスターしたラファージが今度は，公用日本語の使用を起願していることに驚いた。彼はラファージの天才を信用していたのであるが，彼をもってしても急の用には向かなかった。従

って案内のビゲローを抜きにして，日本人と直接まみえる無謀は冒せなかった。「我々の才能を実証する時間的余裕はあるが，日本人はまだ彼方にある」[7]とアダムズはいまいましげに記している。この言葉通りアダムズが歴史家としての才能を実証してみせたのは，かなりの時間が経過してからのことであった。

Ⅲ

さて涅槃に至る旅物語としては見事な失敗に終ったアダムズの日本旅行記を『天路歴程』に比較するのは，いささか気詰まりではあるが，来航中に「二人の悲しみに暮れた浮浪者」[8]と名のっているアダムズとラファージの二人に巡礼者気取りがなかったとはいえまい。日光で仏寺の塔がそびえているのを見て「新エルサレム」だとアダムズは記している。徳川将軍家の支配を脱しミカド（明治大帝）を迎かえた新都・東京も，旧帝都たる京都もともに，アダムズのいう新エルサレムの名にあたいしなかったのである。アダムズの筆で写された巡礼の起点東京は，新聞の三面記事を読む以上の興味をそそらない。読者の哀れを誘うのは平常心を回復していない彼の心の在りようが，異国での言行の端々に見えすいているからであろうか。

> 「日本では誰も彼もげらげら笑っている。人力車夫は汗で着物をしぼるような太陽のなかを5マイルの全速力で走りながらげらげら笑っている。女も笑わないのはいない。しかし彼女たちは下手な木製の人形で，ただ違いは停車場のアスファルトの舗装の上をゲタをはいてカタカタいわせて歩いたり，床の上を平べったい草履ではねたり，すべったりする点だけである。……ともかく日本人はどんな時でも笑うことができる。」[9]

横柄なシニシズムは生来のものであった。が敢ていえば，日本人の狂気に近い笑いに注目する彼の側にもシニシズムを超えた狂気がある。アダムズのこの狂気は，その頃ニューイングランドの知識人をとらえた日本マニアの風狂とは一種の断絶があった。米国製風狂はビゲローやフェノロサに沁み着いていた。日本美術の極意を究めるための入門から免許皆伝までの手順をアダムズは一種の儀式と見做し，これをセレモニーと称していた。ビゲローはマスター・オブ・セレモニー（司会者）であり，フェ

ノロサは一段と厳粛な情報を聞かせるスポークスマンであって，その上日本政府お墨付きの聖ドミニクであった。

> 彼は仏教徒の仲間入をしている。私自身はアメリカ出航の時は仏教徒だったのに，彼のおかげでメソジストの気のあるカルヴィニズムへ宗旨変えをしたというわけだ。⑩

とアダムズは記している。仏教の存在は無視できなかったが，それが日本の文化と結びついた在りようの観察ぶりにはアダムズの狂気が作用している。日本人の怠情なノンシャランスは仏教の無限観に由来するものであったし，崇高であるべき宗教も仏教的解体の結果「いやに古臭い酒落」となり下っていた。アダムズは近代日本の展示会場たる手京，横浜を足早やに歩き抜けたが，日本の近代文化の存在条件である奇妙な「匂い」と同じく，近代化に「はずかしい趣味」を添えている仏教に呪詛をあびせずにはおられなかったのである。

アダムズが仏教的日本の美にふれる思いを感じたであろう新エルサレムたる日光周辺は，新ユダヤ人たる放恣な日本人に満ちあふれていたが，アダムズは頽廃の美もあるこのワンダーランドへ威勢よく踏み込もうとしなかった。その頃の読書人なら先刻承知の，アリスの物語で知られるルイス・キャロルに親しんでいたからである。あるいは，アレクサンドル・デュマの騎士道ロマンスと違って，情を通じる貴婦人がいるわけでもないので，涅槃経が効力を失ってしまったのである。アダムズの書簡に女性への幻想的思慕が見え隠れする事実を知れば，この追跡は研究者にとってまた好個のテーマたる資格があるのだが，ここではアダムズが見惚れるような女性像はのちにふれる少女一人を除いて実現しなかったことを述べれば十分である。

Ⅳ

アメリカ大陸を鉄道が縦横に結んだとき，「辺境」（フロンティア）を失い，さらに夫人の突然の死で楽しかるべき家庭を失ったアダムズは，本土では見世物（ショー）としてしか，もてはやされなくなった「野生西部の見世物」（ワイルド・ウェスト・ショー）の再現を期待して旅に出たのかもしれない。アダムズやバンクロフトの

ような偉大な歴史家にしても「西部については，殆んど知るところがなかった」という意見もあるが，現筆者のいう「西部」とは「アメリカの夢」の担い手としての理想境のことである。「涅槃」を理想として掲げたアダムズとラファジーが出発を前に友人のヘイから贈られたコートは，ラファージを心配させるほど通俗的な，探険家向きのものであった。

だが巡礼者にせよ探険家にせよ，見世物に満足できないことは共通である。東京をとり囲む比較的開化のゆきとどいた地方では，アダムズの心眼にとらえられた映像は，真剣に取り組むべき対象とはうってかわった子供部屋の「ショー」（見世物）と映った。

> ここは子供の国だ。老若男女がすべて御伽噺の人物だ。見世物の一部始終は子供部屋のシーンだ。すべては余興だ。すべては玩具だ。時には女が登場する——安物で悪趣味だ。時には家と庭と子供——まるでお笑いだ。⑪

48歳のアダムズは顧みて，自身の子供時代の幻想の中で遊ぶことに満足できなかった。やはり前年の夫人の突然の自殺は，アダムズに他を言わせるほどに影を曳いている。「人生は見果てぬ夢だ。日本では人は子供部屋の夢を見る」と続けていうアダムズの口調に潜む暗い影は見逃してはなるまい。見果てぬ夢の一方の端には，夫人の亡霊が揺曳しているかのようだ。アダムズの不興はますますつのり，8月10日付の手紙では「もし帰りの船が沈没して跡形もなくなるときがやってくれば，あらためて船上に正座して実生活の味を学んでやろう」といささか捨鉢の軽卒さで口走っている。日光の東照宮でさえ，日本には稀な世界的建築だと認めながら，やはり「うるし塗りのピラミッド」だといい「明白に玩具」だと言い張らざるを得ないところに，彼の暗い部分がある。ユーモアさえも彼の狂気を前にして，ブラック・ユーモアに転化するというべきであろうか。アダムズの一生はシニシズムの影で覆われているが，日本においては，彼のシニシズムは異国情緒に一歩を譲り，生活の原理は彼が8月10日付の手紙で述べたように，美わしいアナクロニズムとでもいうべき狂気に促がされて進行するのである。

思えば奇妙な旅である。アダムズの狂気が日本旅行によって癒されなかったことは，彼が東洋文化の正統を求めて中国へ渡る義務を感じていたことでもわかる。日本

美術史上にフェノロサと並んで特筆されるほどの業績があるのでもない。（フェノロサの業績は今日ボストン美術館のフェノロサ・コレクションにおいて目のあたりにすることができる。）だが，旅のユニークな点からいえば，民間使節なみの貢献はある。アダムズの狂気に近い鑑識眼は，日本の伝統芸術に関する彼の偏狭さにもかかわらず，一面ではフェノロサを凌ぎ，民間行事に注目した点で先駆者の栄誉を担うものである。彼は日光の霊山男体山に関して，毎年夏のシーズンに巡礼者が集う民間の仏教行事を実に適格にレポートしているのである。

V

アダムズは科学の方式と結果を歴史に導入するコントの徒であったが，東洋の茫洋たる岸辺においては，西洋の実証主義がポジティヴな働きをなさないことを知った。彼の歴史的精神とは，西洋の科学的実証主義を包有すると同時に，ロマンチックな遍歴の意志をも具有し，この両者の間を揺れ動くサイクリカルな円環運動であった。従って日本人という種を，日光付近に群生する野生ザルと同一視して「社会的種」として描きあげる科学実証主義の傍らで，封建的な枠を脱した夢見がちな日本女性を，動的な一種の社会的可能性として描くこともできたのである。彼が日光付近の風景を背景に，百姓女や中夏祭の夜などを鋭い観察力で描くとき，その奔放自在な形象に驚かざるを得ない。

例えば彼は日光付近で遭遇した湯治場の風景を，あたかも測量師のように計測して筆にしている。

> ……彼ら（日本の老若男女――現筆者注）は誰一人私たちに注意を払わなかった。一人だけ例外とする人物がいる，16歳の美しい少女で，円やかな体格で白い肌をしている。湯あがりの汗を拭きながら私たちに出来る限り背を向けているのに私は気付いた。
> この可憐な少女が歩み去ってしまうと，この原始的集団には違いない連中にも私の興味はそれ以上注がれなかったのである。⑫

これは日本女性の動態を，感受性豊かに描いた見事な描写である。さらにいえば，

これはアダムズの大衆像の原型ともいうべき姿を写しているのである。彼は20年前を回顧しながら次のように述べる——

> Do not even imagine that I scorn the public, as you say. Twenty years ago, I would have been glad to please it. Today, and for more than a year past, I have been and am living with not a thought but from minute to minute; and the public is as far away from me . . . .⑱

過ぐる一年あまりの日々のあいだに，彼は思考を練るいとまさえなく，刻々と運命の小車が空を撃つ秒単位の生活に追い込まれた。合衆国の歴史の叙述は中断された。アメリカの大衆は忘れ去られ，彼方に追いやられたも同然であった。アメリカ人らしからぬコスモポリタン画家のラファージを同行者として選んだとき「芸術に栄えあれ，よし世界は滅ぶとも」とアダムズはいえたであろう。アダムズの書簡を読むと，これが終曲だと思わせんばかりのクレッセンドが鳴り響くかと思うと，次の書簡ではまた混沌に満ちた序曲が奏でられるといったサイクルの魔術が起るが，それは先にふれたアダムズの両義的な歴史精神と，「よし世界は滅ぶとも」という暗いニヒリズムの共同の産物である。大衆像を尋ねて，日本から転じて，本格的にヨーロッパ中世に——殊にその聖母像に——「入れ揚げ」るに至るのちのアダムズの精神の前兆が，この日本旅行のプロセスにも窺われ，サイクリカルな円環をなして機能しているともいえるのである。

Note

(1) Geoge Hochefield; *Henry Adams*: an introduction and interpretation (Barnes & Noble, New York, 1962) P. 69

(2) Henry Adams; *The Education of Henry Adams*, (Houghton Mifflin, Cambridge, 1918) P. 240

(3) *Ibid.*, P. 264

(4) *Ibid.*, P. 317

(5) Donald Richie and Y. Harashima; *Henry Adams*: *Letters from Japan* (Kenkyu-Sha, Tokyo) P. 52

(6) *Ibid.*, P.6

(7) *Ibid.*, P.11

(8) *Ibid.*, P.7

(9) *Ibid.*, P.11

(10) *Ibid.*, P.27

(11) *Ibid.*, P.15

(12) *Ibid.*, P.41

(13) *Ibid.*, P.43